

マチネ・ポエティク詩集

マチネ・ポエティック詩集

思潮社

マチネ・ポエティク詩集 1092-100101-3016

昭和五十六年一月二十一日初版印刷
昭和五十六年一月二十五日初版発行

著者代表 中村真一郎

発行者 小田久郎

発行所 株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話 (〇三)二六七―八一四一〇編集〱

(〇三)二六七―八一五三八営業〱

振替 東京八―八一二一

印刷 相良整版・福田印刷

製本 岩佐製本

マチネ・ポエティック詩集

GLOIRE DU LONG

DÉSIR,

IDÉE

目次

序

詩の革命 10

作品

福永武彦

火の島 20

物語 22

冬の王 24

詩人の死 26

誕生——「夜」第一歌—— 28

星——「夜」第二歌—— 30

冥府——「夜」第三歌——	32
宿命——「夜」第四歌——	34
薔薇——「夜」第五歌——	36
饗宴——「夜」第六歌——	38
詩法——「夜」最終歌——	40

加藤周一

四つの四行詩	44
雨と風	46
さくら横ちよう	48
妹に	
I	50
II	52
III	54
詩法	
I	56

Ⅱ 58

愛の歌

I 60

Ⅱ 62

Ⅲ 64

原條あき子

髪 68

頌歌 70

望郷 72

春の歌 74

秋の歌 76

夜の歌 78

中西哲吉

祝婚歌 82

窪田啓作

SONNET I	86
SONNET II	88
SONNET III	90
SONNET IV	92
SONNET V	94
SONNET VI	96
SONNET IX	98
SONNET X — 白鹿	100
SONNET XI	102
SONNET XIII	104

水のほとり	106
-------	-----

白井健三郎

夜の祈り	110
------	-----

枝野和夫

朝 114

果樹園 116

海の道 118

降誕祭 120

傷心 122

中村真一郎

愛の歌(断章)

I 126

II 128

III 130

IV 132

V 134

「炎」(一九四三年)より

II 朝の風 138

VII 真昼の乙女たち 140

IX 夏野の樹 142

「頌歌」(一九四三年)より

VII 144

VIII 146

IX 148

X 150

西王母に捧げるオード 152

NOTES 158

解題・安藤元雄 168

序

詩の革命

△マチネ・ポエティク△の定型詩について

日本の抒情詩は今迄三回の革命を経験し、その度毎に美しく恢復して来た。

第一回は恐らく近江朝廷時代で、五音と七音との様々な組合せから成る雑多な諸形式の混沌の中から五七五七七音の短歌形式が誕生した時だった。それは忽ち従来の形式を凌駕して、殆んど唯一の抒情詩形式となり、多数の天才を生み、又、彼等によって進歩させられ万葉集の主要部分を形成した。

第二回は戦国時代で、短歌が五七音と五七七音とに分れることによって連歌となり、元禄期の巨匠達の手で俳句形式にまで固定した。

第三回は明治維新直後、未知の西欧文学の息吹きを浴びて我々の近代文学が出発しようとした時、欧羅巴風の短詩形式の模倣から、新体詩が作り上げられた時である。それは藤村によって新しい形式の可能性を証明し、泣菫と有明との中で近代的な抒情を歌ひ上げることに成功した。そして此の形式は、短歌俳句と共に、現代の日本詩の領土を三分して繁栄してゐる。

明治の文学革命は、抒情詩の領域に於て、新体詩を發明すると同時に、短歌と俳句とをも復活させた。此の三ジャンルは平行して、明治の精神の歌ひ手となり、新しい国語を鍛へ上げた。それが詩の用語としての文語である。それは藤村と同時に子規や啄木の中で、独自の高さを獲得して行つた。

然し、此の文語は、それ自体の裡に弱点を匿してゐた。明治の生んだ此の言語は、本質的に復古的要素を含む点に於いて、明治の社会革命の最良の表現である。泣菫と有明との努力は、我国文学の古典時代への傾倒を通しての、古語の復活に捧げられた。そしてそれは間もなく、白秋の中で悲劇的な矛盾に到達した。即ち白秋の詩は、詩句が完璧に近付くと共に、近代性を稀薄にし、江戸末期の小唄に近付いて行つた。西欧近代詩を学んで近代的な抒情を歌はうとした詩人たちの革命的な意志は、死に絶えようとした。その時反逆児萩原朔太郎は白秋の保守的な完全さを打砕くことによつて、もう一度、我々の抒情詩を近代化さうとした。そのために彼が取り上げたのは、小説家達によつて完成されつつあつた、新しい口語体だつた。それ故、『青猫』は、極度に原始的な手段

による、形式を犠牲としての近代詩への冒険である。

然し朔太郎の浪漫的雄弁は、専ら破壊の第一石となり、詩壇の動きを自由詩から散文詩へと、無限的な崩壊へ誘ふ結果になった。その場合権威ある定型が抵抗として存しなかったことが、詩の解体を悲惨な迄に容易にし、それは詩精神そのものの喪失を招来した。その間、詩の読者は様々な新流派の狂乱を離れて、専ら芸術的満足を、西欧の詩に求め、自国の詩人達を黙殺した。斯うした無政府状態の中に、朔太郎の正当な後継者、中原中也や立原道造が、その短い生涯を形式恢復への古典主義的希求に捧げ終った時、戦争が我国精神のひ弱な近代を尽く破壊するために押寄せて来たのである。

*

六八年以来の新体詩の運動は、西欧詩の模倣を通しての近代詩の確立であった。そしてそれは結局、バイロンからシェリーへ、ラマルチヌからユウゴオへの、浪漫派の詩的精神とその方法との導入による短歌俳句の精神と方法との否定だった。即ち主観的抒情の描出。詩人は自己の感情なり思想なりを、外部の風景へ投射して一つの画面に作り、それを描写する。此の方法は西欧に於い

ては、高踏派に至って、純粹客觀主義の不感無覺の態度《不動の嵐》を描き捉へる迄に徹底化されると共に、絵画的散文への屈服に終った。

その時、詩神はポオドレエルの中に、全く新しい展開を用意してゐた。『惡の華』の詩人はボオとノヴァリスとの交叉点で、近代詩の運命を一転させた。《詩が音楽からその富を奪還する》象徵主義の世紀が開けた。それはマラルメの手で理論的に深化され、その長い白夜の実験室から、我々の同時代の支配的な大詩人ら、ヴァレリイ、クロオデル、ゲオルゲ、リルケが開花した。

此処に於いては詩は最早、浪漫派や高踏派に於けるが如く、詩人の精神中の觀念や思想や感情や感覺やの、外部からの描写（言葉が散文に於けるが如く専ら描く手段となつて、描かれる内容と対立する）ではなく、詩は《言葉によつて書く》即ち言語をその概念的符号としての役割から解放することにより、本来の機能の全的な計算から、語の視像と音楽性とを新しく発見し、その新しい可能的な配列（論理的心理的な必然に従つてでなく、専ら美学的必然に従つて）から、未知の詩的世界を喚起する。自然への屈服ではなく、未知の宇宙の創造。――

その場合、詩人の此の操作を支へる根柢にある確信は、詩人の認識主体が無

限の過去と未来とを含んだ全宇宙の反映を宿す一つの小宇宙^{ミクロコスモス}であると云ふこと、即ちボオドレエルの交響 Correspondance の理論を生む態度である。詩人は対象のためのカメラではなく、全世界の溶合する詩の壺である。

そこから、短い一篇の詩が、無限の可能を孕んだ儘で、詩人の精神の全的な表現となり、《発生状態にある類推^{アナロジー}の複合体》となる。そして《形象及びそれらの形象相互の照応と呼応とによって、最も遙かな意味に到らうとする》。それは或る概念的なものでなく、いはばその内側にある根源的な、交換状態、(プラトンのアイデア)を、詩人の構想力の働く姿勢のままに生け取りにすることで、読者の構想力に交感を起させる。詩はそれによって聴手の《魂の全体へ働きかける》ことが可能となる。

*

前世紀の末、巴里のローマ街の小さな孤独の部屋の中での、執拗な語の転置の試みは、その後半世紀の間に、西欧文学の相貌を一変させた。それは単なる詩の技術の問題ではなく、実に全く新しい一つの思考様式の誕生だった。《作品が全て、人は無》と云ふ、作家の現実に対するライカ的在り方は、新しい世